

福音書の「憎むべき破壊者」の預言はクリスチャンに直接関係しないという根拠

少し前のレポート、No.88 「[イスラエルは神に棄てられた]という解釈は誤り」
の中で置換神学の間違いについて記しました。

補足としてさらに決定的な根拠とも言える事について付け加えておきたいと思いま
す。

仮に、生来のユダヤ民族が、神に棄てられ、その後、神との契約関係は教会（クリス
チャン会衆）に取って替わった、つまり「置換」が成されたとすると、そのタイミン
グを厳密に言うと、イエスの昇天から 50 日後の、ペンテコステの時に、120 人ほ
どのクリスチャンに聖霊が注がれ、「会衆」が発足した時点と言うことになるでしょう。

歴史的にイエスがメシアと成られたのを、ダニエル 9 章の「70 週」の預言に関する
年代計算から見ると、およそ AD29 年頃と考えられるので、クリスチャン会衆が発
足したのは、西暦 33 年頃、遅くとも 35 年頃には存在していたと言えます。

さて、そうなりますと、「置換」が成された後の時代、少なくとも西暦 35 年以降は、
ユダヤは、神と、あるいは神の目的、預言とは何の関わりもないことになります。

ということは、西暦 70 年のローマ軍によるエルサレム倒壊という歴史事実は、聖書
預言とは何の関わりもないということになります。

しかし、これが、正に福音書でイエスが示された預言の成就であったという認識は、
聖書神学では、一般に認められているのは周知の事実です。

この出来事の影響を受けたのは、エルサレムであり、ユダヤに住む人々でした。
そして、それ以外の国、地方に住むクリスチャンには、これと言った影響は何も及ぼ
しませんでした。

もし、置換神学が正しいなら、全てのクリスチャンが、山へ逃げる、あるいはそれに
匹敵するような出来事があつたはずです。

従って、この西暦 70 年の出来事が、明らかにしているのは、その時点で、依然とし
てエルサレムは神から見て「聖なる場所」であり、ローマ軍などが「立ってはならない」

ところとみなされていたということです。

また、神は、生来のユダヤ人、地上のエルサレムに対する預言を、文字通りに成就させる意図を持たれ、それを履行されたということです。

これらは明白であり、僅かな論争の余地さえ全く残さない結論と言えます。

「置換」どころか、この出来事は、ローマ 11 章でパウロが述べている、「神の賜物と招きとは取り消されないものなのです。」(11:29) という事を証明できごとだということです。

さて、では、現代は西暦 70 年と、何か異なる状況にあるでしょうか。

何もありません。

およそ西暦 35 年以降、現代に至るまで、神と人間との関係が変化する出来事も、そうした預言も、(最後の終末期を別にして) 存在しません。

当然、ユダヤが棄てられたのは、西暦 70 年以降だとする根拠もまったくありません。

つまり、現代においても、依然としてエルサレムは神から見て「聖なる場所」であるとみなされており、神は、ユダヤ民族、地上のエルサレムに対する預言を、文字通りに成就させる意図を持っておられることは、何も変わっていないということです。

すでに述べましたが、マタイ 24:15 の「憎むべき破壊者が、聖なる場所に立つのを見たら山に逃げる」という預言は、最初の成就の際、異邦人クリスチャンには無関係でした。

ということは、条件が何も変わらない現代、最終的成就においても、これは、ユダヤに生じる事であり、全世界のクリスチャンには当てはまらないということも、西暦 70 年の出来事は証明しているといえます。

この記事のタイトルを「福音書の「憎むべき破壊者」の預言はクリスチャンに直接関係しないという根拠」としてのは、それを見て、逃げる行動を取る必要があるのは、クリスチャンではなく、ユダヤ人だからです。

それで、終末期において、聖書預言が、全地、全世界に及ぶと示しているものは全世界に、そして、クリスチャンに向けて語られているものは教会(クリスチャン会衆)やクリスチャン個人に、そして、ユダヤ人に対して語られている預言はユダヤにのみ望むとあってよいでしょう。